

**野山** なるほど。日本語学習をしている後輩にも、池田さんと同じように結婚したりいろいろな事情で日本に住むことになった外国人に日本語を勉強してもらうときに、外国人にどうして日本語を勉強するのと聞かれたら、何と言いますか。

**池田** こっちで生活するなら日本語を覚えないと生活できない、と言います。まず、私たちは子どももいるし、子どもはほとんど日本語で話をしますから、親が日本語が分からないと、子どもと交流もできない。

**野山** それは、娘さんが小学校に上がってから、やはり実感としてありましたか。小学校の先生と話をするとか、小学校のPTAの付き合いとか。

**池田** ほとんど私が行きますので実感としてあります。おかげさまで日本語覚えて。

## ■「のしろ日本語学習会」から見えてきたもの

**野山** 分かりました。ありがとうございました。それでは引き続いて、池田さんが話された二ツ井町の公民館の講座のことも含めて、これまでの能代の日本語学習会全体のことと、これからのことについて、生涯学習や社会教育の観点から藤田美佳さんに発表してもらいます。

**藤田美佳** 池田さんが、中国語講座の講師として活動した秋田県二ツ井町公民館、今は二ツ井町は能代市に合併してしまっていますが、そこで行われた「助け合いの中国語講座」の成立過程から、多文化社会のまちづくりということを考えてみたいと思います。

その前に、私がこの「のしろ日本語学習会」とどういふかわりを持っているかに少し触れておきます。私自身、秋田県能代市の出身です。仕事を辞めて地元に戻っている時のことです。うちは商売をしているのですが、そこに、高校時代の担任とALT（Assistant Language Teacher＝外国人青年招致事業による外国語指導助手）が来て、ALTの彼女が公民館で受け持っている英会話講座を手伝ったらどうかと言われ、指定された日に行ったら、それは英会話講座ではなく、「のしろ日本語学習会」の教室でした。そこで、教室にいる方に「私、ALTの○○さんに英語と言われて来たんですけど、どうしたらいいでしょうか」と話していたら、ALTの彼女がやってきて、「日本語教室にはたくさんのボランティアがいるけれども、自分の担当のボランティアが少ないので、できれば英会話講座ではなくて日本語教室に参加してほしい」と言われました。そこから半年で東京へ

戻る予定が、教室にはまってしまい、能代市役所の中にあった白神インターネット協議会で仕事をしながら、毎週ボランティアとして参加していきました。

#### ◆ 地方での日本語学習の現状を伝えたい

北川さんは、地域の人材を育成することについて最初に触れていましたけれども、私自身、この教室に出会ったおかげでというか、出会ったせいというか、教室の中のいろいろな状況を見ていく中から、教室で行われている日本語指導、それから子どもから高齢者まで多世代が参加し、学び合っている生涯学習的なこと、それから地域づくりということを含めて何か伝えていかなければいけないと気づいたのですが、研究書を読んでも、ほとんどが在日や日系ブラジル人など外国人登録者数の多い地域を対象としていて、能代のように外国人も少ない、ひとつの学校にはたった1人、2人の児童・生徒しか在籍していないところは誰も目を向けてくれないのかということが気になり、何とかして田舎でも取り組んでいる人たちがいる、ということを知りたいと思いました。



藤田美佳

それから、教室に参加した当初は、中国帰国者の人たちとのかかわりから児童・生徒の学習支援や進学・就職の相談を担当していたのですが、海外出身女性が日本人男性と結婚し、子どもを持つようになり、親へのサポートの必要性を感じるようになりました。私は池田さんの1歳下ですが、だいたい同じ世代の人たちが能代に結婚で来ている。この状況の中から、ボランティアというよりも、同世代とともに地域に暮らす住民として、いろいろな悩みや、ふだん感じていることを聞く中から、最初は中国帰国者の子どもたちの教育について研究しようと思っていたのですが、彼女たちとの友人関係を通じて、リアルな声を届けられないだろうかと考えて研究に取り組んでいる次第です。

秋田県の外国人登録者の特徴を最初に述べます。全国平均の男女比が、男性が46.3%、女性が53.7%と、わずかに女性が多い状況ですが、秋田県の場合は、90年代までは半々ぐらいでしたが、2000年に男性25%、女性75%に転じてから、今では全国一女性の比率が高く、8割が女性登録者というような状況です。

また外国人登録者に占める中国出身者の割合が非常に高く、4,000人ですが、割合としては、全国3位の中国出身者が多い県です。そしてその中でも、20歳から39歳、いわゆる結婚年齢の方々と、それから研修生、実習生として来てい

る方々が多いことが特徴です。能代市の場合は、大学はありません。ただし県立大学の木材加工研究所がありまして、ハンガリーとかデンマーク、フィリピン、中国など、世界中から研究者の方が来ていて、その家族も教室に参加している状況です。

能代市の在留外国人統計（下表参照）を、国籍別、資格別で見ると、1位の中国は男性16人、女性238人です。全体で345人の外国人登録者がいるうち、ほとんどが中国の方々です。ブルガリアとかルーマニアなど東欧の人もいるのですが、以前はルーマニアから興行ビザで、例えばパブやスナックなどに来ている方が50人単位で毎年定期的な入れ替わりで来ていたので、統計表に入っていますが、ここ2年ぐらゐ急速に減っている状況です。

能代市の二ツ井町ですが、池田さんが中国語講座の講師を務めた当時の外国人登録者数は120人でした。そのうち100人が中国人女性です。池田さんのような日本人男性の配偶者の方と、縫製工場での研修生・実習生でした。秋田県内にはこの二ツ井町を含め、皆さんがご存じのような有名ブランドの下請け・孫請けの縫製会社などがたくさんあります。

### 能代市「国籍、在留資格別外国人統計」

2007.10.31現在

	国名	男	女	計
1	中国	16	238	254
2	フィリピン	0	43	43
3	韓国	14	8	22
4	タイ	0	9	9
5	米国	2	3	5
6	ブルガリア	1	2	3
7	ルーマニア	0	2	2
8	英国	2	0	2
9	カナダ	1	0	1
10	ドイツ	1	0	1
11	イラン	0	1	1
12	ロシア	0	1	1
13	朝鮮	0	1	1
	計	37	308	345

在留資格	男	女	計
教授	2	0	2
宗教	1	0	1
教育	3	2	5
人文知識・国際業務	1	0	1
興行	0	1	1
短期滞在	0	1	1
就学	0	1	1
研修	4	81	85
家族滞在	2	4	6
特定活動	0	127	127
特別永住者	9	6	15
日本人の配偶者等	1	25	26
定住者	4	5	9
在留の資格なし	0	1	1
永住者	10	54	64
計	37	308	345

(能代市企画市民部市民まちづくり課資料から)

それではこの二ツ井町において、どんな外国人支援の取り組みがなされてきたか具体的に触れていきます。二ツ井町は06年能代市と合併しましたが、市の中心部から車で30分ぐらいのところですが、当時は、隣の町から「のしろ日本語学習会」に通ってきているような状況でした。そこで、北川さんが、町にも教室をつくったらいいのではないかと働きかけて、01年4月から文部科学省の「人権教育総合推進地域事業」の助成金が出て、日本語教室が設置され、週1日午前中2時間、外国人女性の方々を対象にした教室が行われていました。社会教育の担当者が、以前、「のしろ日本語学習会」に参加していた中国帰国者3世を担当していた小学校の教諭だったということもあり、北川さんの取り組みに対して非常に理解を示していたことも大きかったと思います。それから、ボランティアは地域の住民、本当にふだん町に住んでいるおばさんたちです。全く日本語教育の専門的な知識もなく、講習を受けたこともない地域の人たちに対して、北川さんが養成講座を実施しながら指導してきました。

#### ◆「助け合いの中国語講座」の誕生

この教室は、文科省の3年間の助成金の期間だけしか運営されておりません、事業終了の04年3月で講座は打ち切りとなっています。現在、能代市と合併してからも二ツ井地区に教室はできていません。残念ながらこのときだけだったのです。二ツ井町で日本語講座が行われていたのと同じころ、「助け合いの中国語講座」というものができました。この名前の由来というのも非常にユニークです。この講座が成立した過程というのは、ひとつには実は消防署員の方々の発言が大きく影響しています。中国人の研修生や実習生というのは、だいたい企業がアパートを1棟、2棟借りて、みんな一緒に住んでいます。そのアパートには、日本人は誰もいないという状況です。たまたまある日、中国の研修生が火傷をしました。そのことを会社に連絡したようで、会社から119番が入りました。消防の方では、日本人から電話がかかってきたので、現場の部屋にも日本人がいるものだろうと思って、救急隊員が向かったのですが、現場には中国人しかいない。火傷をした彼女を20人くらいが取り囲んでいて、一種異様な光景だったと救急隊員の方は言っていました。

太股の部分の火傷だったので、とにかく早くズボンを切って冷やさなければいけない。応急処置をしようとしたのですが、ハサミを持った男性が目の前にいることで、火傷をした彼女はおびえてしまったのです。もう絶対に脱ぎたくないとかたくなに拒んで、救急隊員も、あまりにかたくなに拒むので、まさかそこで強引

に脱がせるわけにもいかないし、でも処置をしなければならない使命もあるし、どうしようと思ったときに、そこから3分のところに病院があるので、このまま押し問答をしているよりは、病院に連れて行ってしまおうという判断をして事なきを得たということがありました。

その後、分かったのですが、その女性はまずハサミにビックリしたということでした。それから、男性に太股を、それもかなり上の方だったので、肌を見られることの恥ずかしさがあったそうです。でも伝えられないし、どうしようという中で、拒むしかできなかったということでした。

その経験に加え、2つ目が消防隊員の方が、中国人研修生の属する企業において、消防訓練を行ったときのことです。ちなみに企業の研修生には消防訓練がありますが、地域の外国人を対象にしたものはなく、その後能代市消防署では、大手スーパーの協力で、「のしろ日本語学習会」のメンバーも参加した避難訓練を行っています。その隊員が消防訓練に行ったときに、中国語の準備をしていなくていいのかなと気にはしていたのですが、企業の方から通訳も説明しますから大丈夫ですと言われたので、特別な準備はせずそのまま臨んだそうです。ところが、実際に消防の説明や消火訓練を行ったりしたところ、会社の人がジェスチャーとか、筆談交じりで説明しているけれども、ちっとも伝わっていないし、みんなも意味が分かっていないと感じたそうです。そのような状況に遭遇して、隊員は、自分の取り組み姿勢を反省し、経験した2点のことを防火弁論大会で発表しました。彼は、弁論の結びで、「山があるなら山岳救助隊がある。海があるから海難救助隊がある。そういった状況から考えると、ニツ井町の外国人登録者はほとんどが中国人である地域の実情に即した救助体制というのに、キチンと取り組んでいかなければならないのではないかと主張します。

そして、隊員の彼は、中国語を自分たちが覚える必要があるのではないかと。地域の実情というのは、120人外国人がいるうち、100人が中国人女性という中で、自分たちの方が中国語を覚えて、緊急のときに聞き取ってあげた方がいいのではないかと。パニックになると、きっと日本語なんて出てこないだろうし、中国語でもなかなか大変だろう。それから研修生たちは、実際に企業に、「働き」に来ている状況の中で、一日中工場の中にいる。日本語学習の場に通っているとも聞いたことがないし、勉強をする機会もないだろう。もし機会があったとしても、一日中仕事をした後に勉強をするのはとても大変だろう。2～3年の滞在で日本語を完璧に覚えられるほど、日本語は簡単ではないだろうと考え、自分たちの方から歩み寄って、中国語を覚えてほしいのではないかとというような内容の弁論をし

ました。

一方、地域の消防団員として弁論を聞いていた写真店の店主で、公民館運営協議会の委員でもある方が、弁論大会後の協議会で、今後の公民館運営と生涯学習講座の設置に関する話し合いをした際に、防火弁論を聞いたことで、中国語というのがみんなの興味になっているのではないかと。それから、能代港から大連に定期航路が出ているので、大連とのビジネスをしている会社もたくさんある。仕事で興味を持っている人たちもいるだろうし、これからは英語よりもむしろ中国語、と思ったそうです。

もうひとつは、この方が、先ほどお話しした火傷をした中国人女性たちが住む近所の方で、研修生の火傷の件は軽くて済んだからよかったけれど、火事になっていたら、アパート2棟ごと燃え、わが家にも延焼していたかもしれない。「火事」という中国語を自分が覚えるか、研修生たちに日本人に伝えてくださいと教えるか、何とかしなければいけない、と思ったそうです。

それから写真店主として、中国人女性がたくさんいるので、もしかして自分が中国語ができれば、近所だし、研修生たちが写真の現像に来るのではないかと考えて、公民館運営協議会の中で話したところ、多方面から中国語の必要性が出されました。この救急車の出動、防火弁論大会、公民館運営協議会、こうした一連の流れの中で地域の課題に即した生涯学習講座をやろうと、中国語講座の開催が決定しました。そして、その公民館館長から、能代市で中国語学習会の講師をしていた経験もある北川さんに中国語指導の依頼がきました。そうしたところ、先ほどの池田さんの話にあったように、北川さんは、「あなたの地域には日本語能力試験1級に合格した池田さんという中国の方がいます」と推薦したという流れで池田さんが講師を務めることになった次第です。

#### ◆「中国語講座」から広がった「助け合い」

この「助け合いの中国語講座」ですが、そのネーミングの妙というのもあると思います。防火弁論大会がきっかけであることと、お互いに地域の住民として助け合うというところから、単なる中国語講座ではなく、「助け合い」の精神を組み込みたいという思いをこめて、館長さんが決めました。全6回、1回2時間の講座で、参加者は毎回40～50人という状況でした。町の人口は約1万人、こういった中で毎回50人、多いときは60人というときもありましたが、これだけの参加者をどうやって確保しているかということについて、館長さんが私に打ち明けてくれました。「こういう町でそもそも講座をやっても、中国語でなくてもそ



うそう来てくれない。本物の中国語が聞けるよと、いろいろな企業にも説明に行きました。役場にも、企業にも、それこそタクシー会社にも、旅行代理店にも、全部回って説明に行きました。そういったかきがあって、これだけ多くの参加者がいるんだよ」と。

参加者は役場の職員、公民館員、郵便局員、消防署員、銀行、タクシー会社、商店主、美容師とか、先ほどの写真店の方など多岐にわたりました。美容院の方にお話を聞いたところ、中国の女性が多いから、絶対に3年もいれば髪形だって変えたくなるし、おしゃれだってしたいでしょうと。そうしたら、うちに来て「ニーハオ」と言われたら、またうちにも来てくれるかもしれないから参加したと話してくれました。年配の方でしたが、意欲をもって参加されていました。また、妊娠する中国出身女性も多いということで、助産師の方も来ていました。それから中国人女性を配偶者に持つ日本人男性も、そんなにしっかりととは覚えられないだろうけれども、自分も夫婦の会話のために中国語を覚えてみようと思うと言って来たり、中国と取引のある企業の人、中国語学習に興味を持つ地域住民、高校生、親子で参加した方もいました。このように世代も職業も多様なたくさんの方々が参加していた状況でした。

教材はオリジナルで、内容は、公民館館長が消防署員、救急隊員の人たちから、緊急時にどういった用語が必要かという聞き取りをして、それに基づいたテーマ設定を行い、その後、北川さんと池田さんと3人で打ち合わせをして作成しました。また指導法については、北川さんがこれまでの中国語と日本語の言語指導の経験に基づいて、池田さんをサポートするという形で取り組みました。私自身も教室に参加して、消防署員の人たちと同じグループで学んだのですが、自分も大学院のときに、日本語教室の参加者たちとより深く話したいと思って中国語をやったのですが、ついていけなくて断念してしまった経験があったので、池田さんがすごく丁寧に指導しているのがよく分かって、こういう形で教えてもらえるといいなと思ったのを覚えています。

この中国語講座には、実は池田さん以外の、日本人男性が配偶者である中国出身女性も参加しました。先ほど話した中国出身女性の配偶者の男性が1回目に参加して、奥さんに「指導しているのは池田さん、それからサポートで北川先生が来ていた」と伝えたら、それを聞いた彼女が、「2人だけだったらきっと手も足りないだろうし、各テーブルに発音ができる人がいた方がいいのではないか」と思って、協力しに来たのです。その方は、池田さんにとりたてて親しい関係ではなかったのですが、日本語の能力が十分でなくても、地域のために役立ちたい、

自分も何かしたいという気持ちは、誰にとっても変わらないのです。そういう形で参加しているという方もおりますし、池田さんのお嬢さんも参加して、一緒に中国語を学んでいたというような状況でした。実際にこの講座開設の大きな要因となった消防署の方々は、署内でローテーションを組んで、毎回必ず複数の人が出席する仕組みをとり、3人から5人の方々が参加してくれていました。

## ◆ 見えてきた課題と展望

最後に、この「助け合いの中国語講座」の意義と課題と可能性をまとめます。社会教育、生涯学習の観点から見て、地域の学習課題を反映させた講座の設定とそのスピーディーさというところは、非常に注目すべきところだと思います。また、地域経済、先ほど大連の話もしましたが、縫製工場は国内でも、ごく一部の高級品以外は地元でも作っていない。中国に仕事を出している。さらにそれを戻して、加工して東京へ送るといった状況の中で、中国との関係強化というのがビジネス面ですごく重視されているので、それをより地域住民に意識化させる、中国との取引が重要なのだということを地元の人たちに広げる、という意味でも刺激になっていると思います。

問題としては、せっかくお互いに地域に暮らす者同士が助け合うという発想でつくられた講座が、この6回で終わってしまったことです。だいたい地域の日本語教室やこういう講座は、首長の交代や合併などで、あっけなく消えてしまう側面があります。どうやってこれをシステムとして継続させていくのが課題と言えます。中国語に興味を持った高校生たちもたくさんいますし、修学旅行先を中国に設定している高校もあるので、中国語の学習意欲というのは決して消えていません。地元の高校でのアンケートでも中国語や韓国語に対するニーズはありますが、そういったものを学ぶ機会はなかなかない。一番近い秋田大学でも、片道60キロです。電車で行っても1,000円以上かかりますので、ちょっと勉強をしたといっても、気軽に学べるような状況にはありません。

それから可能性として、この「助け合いの中国語講座」が行われてから、地域の人材、外国籍住民をどう活用していくのかということに着目していった部分は、非常に興味深いと思います。04年から旧二ツ井町の富根小学校で、英語の特別非常勤講師が採用されました。これは秋田県教育庁が、地域人材を活用した英語指導プランに小中学校を対象に取り組んで、そこでの英語講師として、フィリピンの女性が、毎日学校に入っていました。その彼女は、今は藤野町（隣町）の小学校でフィリピンから来た児童に対する学習サポートを行っています。それ



と、07年4月から、池田さんは二ツ井小学校で中国出身の児童を対象とした特別非常勤講師となって、日本語のサポート、それから中国語での通訳に取り組んできました。このような形で、地域の外国人を積極的に活用しようとする姿勢はありますので、今後どうやってシステム化していくのか、継続させていくのかというのが、大きな課題であると思います。

先ほど登壇者で打ち合わせをしていた際に、高木光太郎さんから地域住民にとっての成果はどういうところなのかと、質問がありました。実際に写真店は、中国人にとっては近所ですから、中国に写真を送りたいとき、現像しに来るわけです。最初に来た人に対して、店主が一生懸命に中国語で身ぶり手ぶりで話したところ、どうもあそこに行くと中国語で対応してくれると彼女たちの間に広まったようです。店主は、別に中国語が流暢に話せるわけではないけれども、自分たちが受け入れられている、あそこの店に行って気分よく現像を頼めるというのが分かると、その後も次々と中国の女性たちが現像を頼むようになった、と言っています。このように、結果的に商売に結びついていったというようなこともありました。